

秩父市産材使用した木棺を開発

埼玉県秩父市の木材・葬祭関連企業

木

埼玉県秩父市では、地元製材工場をはじめ木工職人、葬祭会社等と連携し、秩父市産材を使用した棺の開発に取り組んでいる。一般的には棺の原料は、国産モミを使用していたが、資源の枯渇に伴い外材利用が進み、1990年以降からは中国などで製造された棺が多く、日本に流通している。また、合板の表面に天然木のツブ板を張った棺、木目調のプリント合板や合板上に布を張った布張り棺桶なども市場に増えている。最近では、各地で地域材の活用を目的に棺を作る事例も出てきている。今回は、秩父市産材の棺開発の現場を追った。

伐採適齢期の資源活用

秩父市の森林面積は約5万畝、森林率87%と森林資源が豊富で杉・松・サワラ等の人工林が伐採期を迎えている。杉・松は住宅の構造材や内装材に適用しているが、サワラは強度の関係で構造材としては使用が難しいなど用途が限られていることから、伐採が進まない現状がある。

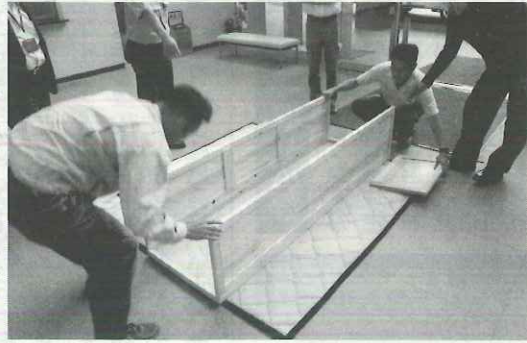
として需要を開拓してきた経緯がある。

これまでサワラの生産流通を促すため、島崎木材が加工板「秩父大滝さわら」を金子製材の協力で商品化し、風呂やトイレの腰壁、室内の壁内装材などに活用できるうえ、その価値の一部を山へ還元する

棺なら強度に関係なく活用できるうえ、その価値の一部を山へ還元する



イベントで秩父市産サワラの棺を展示して入棺体験も実施



棺を組み立て式にしたことで業者の負担が減った

生涯木育から地域資源創出へ

ことができ、棺の製造が将来的には地場産業として地域の活性化につながる可能性も高いと考え

秩父市の企業が知恵と技術を結集

棺の製作には、葬祭関連企業・団体をはじめ各地で木棺の製作に取り組んでいる企業・自治体にて現状等をヒアリングして棺について情報収集を行った。開発には、秩父地域の木工所と繊維業界、葬祭業の知識と技術を合わせた。

昨春秋ごろには秩父市産のサワラ、杉、松棺の試作品が完成。燃焼実験を公営火葬場の協力で実施、燃焼速度や燃え残りなどを検証し、重量実験では砂袋を入れて120×150cmの重みに耐えられることを証明した。

秩父市の取組みと一致

地元の自治体も商品開発や燃焼実験等での取り



棺のなかに砂袋を入れて耐荷重を測定

組みを後押ししている。生涯木育にいち早く取り組んでいる秩父市では、2015年に生まれた子どもにも市産材おもちゃを寄贈するウッドスタート宣言の取り組みや木造の家のほか、人生の最後には木製棺など秩父産の木を市民生活で活用できないかを検討している。

「木の一生と人の一生は似ている。自分と同時期に成育してきた故郷の木に包まれて送られたいと思う人もいる」(秩父市環境部森づくり課)と話す。

2月には、東京おもちゃ美術館主催の「木育サミット2018 in 秩父」で秩父市産サワラ、杉、松の3本の木棺が並び、顔をのぞく小窓には伝統織物「秩父銘仙」の布が張られ、地場産物を使用した棺を展示した。

入棺体験で記者も棺の香りに包まれると、ふたを閉められても不思議



公営火葬場を借りて燃焼実験を実施

と恐怖を抱かなかつた。組立て式の開発で配送コストを削減

地域材を使った国内での生産ならば、オーダーメイドの棺も比較的容易に制作ができ、市場の要望にも柔軟な対応が可能になる。

次の段階として簡易組み立て式の棺を試作した。棺が簡易組み立て式になれば、輸送コストの削減や葬儀業者の負担軽減につながる。前回の試作と同様、簡易組み立て式でも燃焼・耐荷重実験で葬儀関連団体が出している自主規定をクリアした。

金子社長は「秩父の棺はムク材で構成されており、近くの木を使うことができる環境に優しい製品ではないかと思う。住宅建設の減少が予想されるが、日本の森林資源は成長を続けている。棺の製造以外にも利用を拡大できる分野が広がり、山や地域へ還元できる仕組みづくりができればいい」と語った。

現在は役物を使用しているが、節ありの材料も使うことができれば地域材の需要拡大につながるのではないかと考えている。

今年度は秩父市を中心にパイロット事業として10本の棺を実際に使ってもらい、現場のデータ集めに当たる予定だ。